

## 《論 説》

## オランダ：「完全比例代表制」下のGAL-TAN争点

作 内 由 子

はじめに

西ヨーロッパにおける文化軸について現在研究が盛んになされている。ここでいう文化軸は、経済軸における左右から独立した対立軸であり、しばしばGAL-TAN軸とも呼ばれる軸のそれである (Hooghe et al., 2002)。国家を通じた再分配の多寡を問う争点とは異なる対立軸については、1970年初頭にイングルハートが経済的に豊かになった国で若者を中心に脱物質主義的価値観が広がっていることが指摘したのち、それを念頭にキツェルトが環境政党と急進右翼政党の研究を通じて権威主義—リバタリアンという政党システム上の対立軸を提唱し、現在では第二軸の存在は自明のものとして議論がなされているといえる (Kitschelt, 1989; Kitschelt & McGann, 1997)。

このように西ヨーロッパの文化軸の起源については60年代以来の文化変容が念頭に置かれているものの、政党政治に関する研究は文化左派の典型たる環境政党（および場合によっては左翼ポピュリスト政党）と文化右派の典型たる右翼ポピュリスト政党とに集中している。

ノリスとイングルハートの文化的バックラッシュ論 (Norris & Inglehart, 2019) によれば、世代間の価値観の変容に加え、都市化と進学率向上によって若い世代で左派のイデオロギーを持つ人が増え、文化的に右派のイデオロギーを持つ高齢で農村の人々が対抗動員され、右翼ポピュリスト政党となるという。

この文化的バックラッシュの議論が文化変容へのバックラッシュと右翼ポピュリスト政党への支持増加とを結びつけるのに対して、本報告では60年代以

降のオランダにおける政党システムの変化を追うことで、今日のオランダにおける文化軸の対立を説明する。

オランダの特殊性はその一端を選挙制度に求められよう。オランダの下院選挙制度は事実上全国一区の比例代表制であり、議席獲得に必要な得票は有効投票数の0.67パーセントと議会への進出が容易である。それゆえ、これまで必ずしも注目されては来なかったが、文化変容とそれへの反動は確かに早い段階から政党システムに反映されてきたのである。そのため文化変容とその反動は環境政党—右翼ポピュリスト政党だけでは説明しえない。1960年代以降の政党システムの変容を長期的に検討することで現在のオランダの文化軸の特性を明らかにする。

## 1. オランダにおける現在のGAL-TAN軸

### ① 現代オランダの政党システム

オランダの下院は全国一区の比例代表制によって選出される。阻止条項がないため、定数150を得票率で比例配分する。つまり、有効投票数の0.67パーセントを獲得すれば議席が得られる。まさに「完全比例代表制」なのである（水島2021）。このような選挙制度の下では、制度論が予定する通り多党制になりやすい。1960年代の半ばまではキリスト教民主主義政党3党（カトリック人民党Katholieke Volkspartij, KVP、反革命党Anti-revolutionaire Partij, ARP、キリスト教歴史同盟Christelijk-Historische Unie, CHU）、社会民主主義政党の労働党Partij van de Arbeid, PvdA、自由民主主義政党の自由民主人民党Volkspartij voor Vrijheid en Democratie, VVDの5党が議席の大半を占めていた。カトリック、カルヴァン派、労働者はそれぞれ世界観に基づくサブカルチャー（柱、zuil）を形成し、メンバーに対して組織を通じてさまざまなサービスを提供していた。この強固な組織ネットワークを通じて選挙の際に同じサブカルチャーの一角を占める政党に対して安定した票をもたらすことができていたのである。

戦後次第に豊かな社会になっていくにつれ、この世界観に基づくサブカルチャーの紐帯は弛緩する。1967年の選挙は既成5政党が大きく議席を減らし、民主'66(Democraten '66, D'66<sup>1)</sup>)をはじめとする小政党が叢生することになった。このうち70年代半ばまで小政党の議席が増加し、80年代にいったん落ち着いたあと90年代に入って再び選挙変易性が上昇して小政党が乱立することになる。90年代までは小政党の政権入りはあっても政権の中心は既成政党にあった。しかし90年代以降の既成政党の議席減と有効政党数の増大を背景として、2000年代以降は小政党が政権の政策形成において無視できない存在となっている。2010年代にこの傾向は加速し、既成の大きな政党は議席を減らしていった。特に中道で連立の核となっていたCDAが10パーセント前後の得票しか得られなくなり (Pellikaan et al., 2018)、組閣は複雑化している。新旧政党が入り混じって中規模政党と非常に小規模な政党とで議会在議が構成されるようになり、また上院少数派内閣も2010年代には常態化して、中小規模の新政党なくしてはもはや政権が立ち行かなくなっているのである。

オランダの政党数はなにによって決まっているのか。それは現在は争点の数によって決まるといわれている (Lowery et al., 2013)。オランダの政党システムの特徴の一つは政権参加が新党にも開放されている点にあり (Mair, 2008)、連立レベルで民意を集約できるならば、あえてさまざまな争点をパッケージ化した大政党に投票するのではなく自分が重視する争点に重きを置く政党に投票しようとするであろう。

一般的に新しい政党は新しい争点を見つけ出し、そのニッチな争点を強調する。そのうえで何度か選挙で当選者を出し続けることでイシューオーナーシップ(issue ownership)、すなわち自他ともに得意と認める政策領域を獲得する。オランダでは選挙変易性が高いが有権者は経済的な左派政党・右派政党の中で投票先を変える傾向があるため、単に自分の政党の固定的な支持層に訴求するというだけでなく、得意な政策分野を持ち、その重要性を強調することが似たような有権者をめぐって競合するうえで重要な戦略の一つとなる。近年のイ

---

1) D'66は1985年にD66へ名称が変更された。

シューイールドモデルissue-yield modelにおいては、自分の党が支持者かどうかにかかわらず有権者に信頼に足ると思われている争点を強調して選挙市場での票の獲得を目指すことが指摘されており、オランダでもその傾向が強くみられる (van Ditmars et al., 2020)。

## ② 現代オランダの政党システムにおけるGAL-TAN軸

現代のオランダの政党システムをGAL-TAN軸に即して整理してみよう (表1)。表の右側はチャペルヒル専門家調査の2019年版である (Jolly et al., 2022)。0から10までの幅で数字の小さいほうが左派、大きいほうが右派になる。数字が大きくなるにつれて4段階で網掛けをしている。これで見ると、既成政党では左派よりも労働党、右派寄りがCDA, VVDで、文化軸のさまざまな論点で濃淡はあれだいたい一貫した立場をとっており、これは経済軸とも重なっている。

しかし文化変容の中で生まれた政党は必ずしもあてはまらない。グリーンレフトやD66は文化軸ではだいたい左派寄りである。他方、CUは文化軸の中で割れており、生活スタイルや多文化主義についてはやや右、環境・移民問題ではやや左である。PVVは移民問題・多文化主義・環境では極端に右だが、ライフスタイルでは中道である。

文化軸を見るうえでもう一つ注目する点は、経済争点との関係である。福祉をめぐり、かつて新自由主義的であった右翼ポピュリスト政党が経済軸上で再分配に移行していることはしばしば指摘されている。他方でオランダでは文化左派が経済軸上でも広がりを持っている。グリーンレフトは左派であるが、D66は中道右派なのである。またキリスト教政党のCUは中道左派に位置する。

表 1. 1959年以降のオランダの選挙結果(得票率)と2019年の専門家調査による政策位置

現 任	1959	1963	1967	1971	1972	1977	1981	1982	1986	1989	1994	1998	2002	2003	2006	2010	2012	2017	2021	経済左右	文化左右	生活	環境	多文化 移民	
キリスト教政党	-	-	-	-	-	31.9	30.8	29.4	34.6	35.3	22.2	18.4	27.9	28.6	26.5	13.6	8.5	12.4	9.5	6.7	7.2	5.7	6.5	6.8	7.0
	ARP	9.4	8.7	9.9	8.6	8.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	CHU	8.1	8.6	8.1	6.3	4.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	KVP	31.6	31.9	26.5	21.8	17.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ChristenUnie	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2.5	2.1	4	3.3	3.1	3.4	3.4	4.3	8.2	6.4	4.6	5.9	4.5
	RPF	-	-	-	-	-	0.6	1.3	1.5	0.9	1	1.8	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	GPV	0.7	0.7	0.9	1.6	1.8	1	0.8	0.8	1	1.2	1.3	1.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SGP	2.2	2.3	2	2.3	2.2	2.1	2	1.9	1.7	1.9	1.7	1.8	1.7	1.7	1.6	1.7	2.1	2.1	2.1	7.2	9.9	9.0	6.9	9.3	7.9
社民政党	30.4	28	23.6	24.6	27.3	33.8	28.3	30.4	33.3	31.9	24	29	15.1	27.3	2.2	19.6	24.8	5.7	5.7	3.6	3.1	3.1	4.2	4.4	4.2
PvdA	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2.3	0.8	1.6	1.5	1.5	1.6
GL	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4.1	3.5	7.3	7	5.1	4.6	6.7	2.3	9.1	5.2	-	-	-	-	-	-
	PPR	-	-	-	1.8	4.8	1.7	2	1.7	1.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	PSP	1.8	3	2.9	1.4	1.5	1	2.1	2.3	1.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	CPN	2.4	2.8	3.6	3.9	4.5	1.7	2	1.8	0.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	EVP	-	-	-	-	-	-	0.5	0.7	0.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
SP	-	-	-	-	-	-	-	0.5	0.4	0.4	1.3	3.5	5.9	6.3	16.6	9.8	9.7	9.1	6	1.4	4.3	3.2	4.6	5.6	5.3
自民政党	12.2	10.3	10.7	10.3	14.4	17.9	17.3	23.1	17.4	14.6	20	24.7	15.4	17.9	14.7	20.5	26.8	21.3	21.9	8.2	5.0	4.0	7.7	7.8	7.9
D66	-	-	4.5	6.8	4.2	5.4	11.1	4.3	6.1	7.9	15.5	9	5.1	4.1	2	6.9	8	12.2	15	6.2	1.4	1.9	4.2	2.5	3.0
急進右翼政党	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5.9	15.5	10.1	13	10.8	6.5	7.2	4.8	9.0	9.9
PVV	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
FvD	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.8	5	9.1	8.3	6.4	9.3	9.9	9.9
BP	0.7	2.1	4.8	1.1	1.9	0.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
CD*	-	-	-	-	-	-	0.1	0.8	0.5	0.9	2.5	0.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
LPF	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.7	5.7	0.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
その他	0.5	1.6	2.5	9.5	6.1	2.1	1.7	0.8	0.8	0.8	6.2	2.4	2.4	1.2	2.7	2.4	4.6	9.9	15.4	-	-	-	-	-	-

このようにオランダでは文化軸できれいに左右を分けるのが困難である。(De Vries, 2018) によれば移民と反EUについては第2軸で説明できるが、ジェンダー・セクシュアリティ、環境などはこれでは説明することができない。

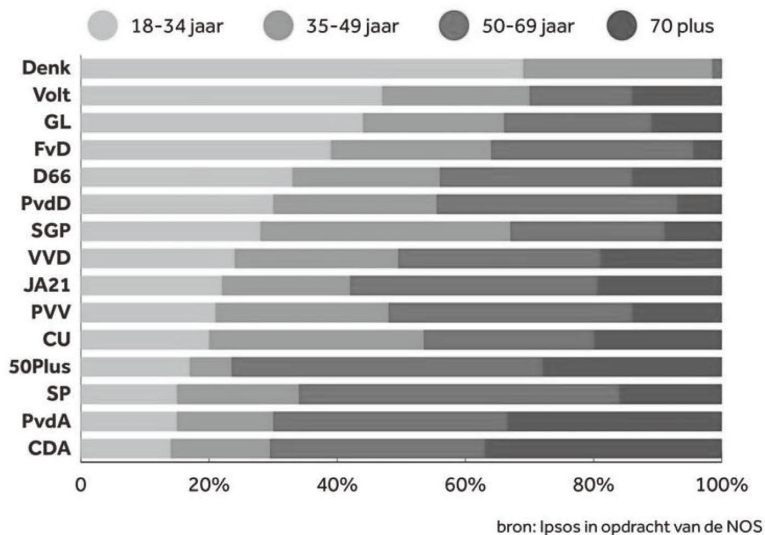
このようなオランダの政党システムの特徴を念頭に置けば、社会のバックラッシュを文化的な左翼に対する反動ととらえ、それが右翼ポピュリスト政党の得票につながっているというノリスらの議論はオランダに関していえば過度な単純化のそしりを免れないであろう。

### ③ 世代別投票先とGAL-TAN軸

やや本論からは外れるが、文化争点と世代の関係について検討しよう。ノリスらは文化軸で右派に投票するのは高齢層に多いとするが、それは少なくともオランダについては当てはまらない。

図1. は2021年の総選挙において各党がどの世代からどの程度の票を獲得し

図1. 2021年総選挙における各政党の得票における世代別の割合



たかを示すグラフである<sup>2)</sup>。ここからわかる通り、既成政党のCDAとPvdAとが若者からの支持を得られていない。他方、右翼ポピュリスト政党のPVVは得票の20パーセント程度は34歳までの有権者から得ており、ボリュームゾーンは中年層である。同じくFvDはより若い世代から支持を得ている。伝統主義的な正統カルヴァン派の政党であるSGPとCUは40代以下が投票者の過半を占めている。なお、文化左派が若年層から支持されているのは顕著で、D66や環境政党であるグリーンレフトGroenLinks, GLに反映されている<sup>3)</sup>。(Rekker, 2021) による同選挙の分析によれば、CDA, PvdAの投票者の中央値が60代前半であるのに対し、PVVは50代前半、FvDは40代半ばである。

同研究は、世代別の争点別の立場を示しているが、そこでは確かに高齢である方が移民の同化を支持し、若い世代の方が多文化主義的になる傾向を示している。もっとも、それは高齢者の右翼ポピュリスト政党への投票には結びついていない<sup>4)</sup>。その理由として挙げられるのは、同研究においてはサブカルチャー全盛の時代に政治的社会化を経た世代であるために旧来の政党に投票するためであり、また別の研究では高齢世代は新しい争点よりも旧来の経済争点を重視するためである (van der Brug & Rekker, 2021)<sup>5)</sup>。

移民に対する差別意識の観点では、明確に世代間の差が現れる。まず、戦前世代 (1925-34年生まれ) と戦後世代 (1955年以降生まれ) でわければ、明確に戦前世代が移民に対する差別意識が高い。しかし、その後の世代でみると若

---

2) オランダの公共放送NOSが調査会社Ipsosに委託して行った調査である。

'Verkiezingen in cijfers: hoge opkomst onder jongeren en zorg belangrijkste thema', NOS, 2021年3月18日

- 3) もっとも上にあるDENKはトルコ系移民の政党、次のVoltはヨーロッパ統合を推進しようという初参加の政党である。今回の選挙ではそれぞれ3議席ずつ獲得している。
- 4) (Margalit et al., 2022) ではオランダにおいて55歳以上の権威主義的傾向を持つ人は右翼ポピュリスト政党に投票しやすいという世代間対立を示唆する結果が出ているが、この論文の著者が指摘する通りその実数は非常に少なく、意味を持たない。
- 5) 同研究によれば、オランダにおいてはコーホート間で政党選択を決定する要因に大きな違いがでるものの、時代を超えた特定の年齢層に特有の支持の傾向はほとんどみられないという。

い世代の方で差別意識が少なくなっていく傾向はみられない。その後の世代にも世代間で差別意識の差はみられるものの単に若いかな否かではなく、10代後半の時期に移民が流入するか、もしくは失業率が高まった世代で差別意識が高まる傾向にある (Coenders et al., 2008, 2015)。

このようにオランダではGAL-TAN軸で政党がきれいにわかれず。またTAN政党が主に高齢者から支持されているわけでもない。本稿ではその原因の一端として、文化変容とその反動が1960年代および70年代に政党システムに反映されたことに求める。周辺諸国ではしばしばGAL政党である緑の党が70年代末から80年代にかけて設立され、TAN政党である右翼ポピュリスト政党がその後90年代以降に勢いを持つようになったといわれる。しかしオランダでは参入障壁の低い選挙制度によってGAL-TAN政党が早期に政党システムに定着したために当時の政治的な対立がより直接的に反映されることになる。以下ではまず2で60年代から70年代の文化変容およびその変動が政党システムに反映されたことを確認する。もっともこれはそのまま維持されたわけではなく80年代末から90年代に政党間競争の在り方が変化しそれに伴って政党が再編されたことを3. で検討する。4. では2000年代の右翼ポピュリスト政党の政策位置がどのように既存の政党システムに規定されているかを分析する。

## 2. 1960年代70年代の政党システムの変化<sup>6)</sup>

### ① 文化左派

オランダにおける文化変容は主としてオランダのエリートの権威と支配に対する反抗であった。オランダは国家だけでなくサブカルチャーが権威と支配の源になっており、政治支配、教会支配に対するアンチテーゼとして文化の変容が生じた。

60年代の文化変容を文化左派の側で真っ先に代表したのは平和社会主義党

---

6) 本章は特に注がない限り、田口 (1989) による。



Pacifistisch Socialistische Partij, PSPである<sup>7)</sup>。1957年に結成されたこの政党は冷戦と核兵器への反対を主張して急進的な左派の票を集めた。最初の選挙となる1959年には1パーセント程度の票しか得られなかったものの、ベルリンの壁建設やキューバ危機で反戦の機運が高まり、さらにベトナム反戦運動が盛り上がった1960代前半には3パーセントまでその支持を拡大することになった。

現在から見て文化左派と呼ぶかはともかく、既成の体制に対して否をつきつけ票を伸ばしたという点で農民党Boerenpartijも文化変容の恩恵を被った党である<sup>8)</sup>。農民党は本来、公法産業組織を通じて農業の大規模化を図ろうとする政府に対してしばしば直接行動をもって対抗していた農民たちの党である<sup>9)</sup>。1959年の選挙ではぎりぎり議席に届かなかった。しかし、1960年代にはいると、農民たちの政府への抵抗姿勢に共感した都市の人々が農民党を支持するようになる。1967年総選挙では7議席を獲得するなど、中央・地方の選挙で急拡大したが、地方議員が元SSや元NSB(オランダのナチ党)であったというスキャンダルや内紛によってすぐに勢いを失った。

文化変容によってもっとも華々しく登場した政党はD'66といえよう。その名の通り1966年に結成されたD'66は翌年の総選挙で4.4パーセントの票を得、7議席を獲得した。当時、新しい政党がこれだけ躍進するのは異例のことで、既成政党の得票減と相まって衝撃をもって受け止められた。なおD'66は60年代70年代に勢力を拡大した非既成政党のうち現在まで残っている唯一の政党である。

D'66の主たる主張は政治改革である。「柱」のエリートによる有権者から隔絶された交渉による政治を批判した。具体的には二回投票制による首相公選、議会の政府に対する権限の強化、議員のフルタイム活動とそれを可能にするた

---

7) Pacifistisch-Socialistische Partij (PSP), [https://www.parlement.com/id/vh8lnhrp8wsk/pacifistisch\\_socialistische\\_partij\\_psp](https://www.parlement.com/id/vh8lnhrp8wsk/pacifistisch_socialistische_partij_psp) (2022年8月23日最終閲覧)

8) Boerenpartij partijgeschiedenis. <https://dnpp.nl/dnpp/pp/bp/geschied> (2022年8月23日最終閲覧)

9) 公法産業組織については水島(2001a)を参照。公法産業組織は各産業に対して政府が介入するための手段と位置付けられていたが、キリスト教系政党の抵抗によりほとんど失敗に終わった。農業はこれが例外的に導入された産業である。

めの議員報酬の引き上げなどである。特に、当時は選挙を経ずに首相が交代し、選挙の時に比例の筆頭候補でない首相が続いていたために首相公選制の要求は説得力を持ったのである。

文化変容は既成政党である労働党の支持も増やした。労働党内では若い党員が「新左翼Nieuw Linkes」を名乗り、地方組織を通じて党組織を掌握し、党の方針に大きな影響力を行使した(水島 2001b)。党首であったデン・アイルは新左翼に必ずしも好意的ではなかったが、競合する左派の小政党に対抗するためには彼らをとりにまざるをえなかった。新左翼の影響のもと、労働党は左派政党による多数派戦略である「分極化戦略」を80年代までとることになる。

1960年代末にはカトリック政党KVPから左派が分裂し、急進党Politieke Partij Radicalen, PPRを設立した。PPRはKVPが他のキリスト教民主主義政党2党と協力を深めていく中でKVPの保守化を懸念し、それに反対して党を割った。綱領をみるとオランダのキリスト教政党に特徴的な神やカトリシズムに関する言及がなく、カトリシズムと政策を直接結び付けない方針をとっている。1972年に7議席を獲得したのがピークで、その前後は一貫して2～3議席を獲得し続けていた。

このように、オランダにおいては1960年代70年代の文化変容の受け皿となる政党が複数あったのである。既成政党に不満をもつ有権者はこれらの中から好きな政党を選ぶことができた。5つの政党を紹介したが、それぞれ性格が異なっており、大きく分けて二つの軸で説明できる。

一つ目は政権参加への意欲である。既成政党である労働党、カトリック党の自民政党との連立を忌避し、労働党との協力のために分裂した急進党、そしてD'66は政権参加を意図していた。この三党は左派多数派政権を実現しようと71年総選挙と翌72年総選挙の前にオランダでは異例の選挙前共同選挙綱領を発表し、「影の内閣」を構成した(水島2001b)。彼らはイギリス型の二大政党による政権交代モデルを志向し、党の合同も視野に活動をしていた。この態度は運動を通じて政治的要求をつきつけることに重きをおくPSPと対照的であった。

もう一つは明確な経済左翼路線をとるか否かである。労働党、PSP、急進党はこの路線をとり、D'66、農民党はそれをしなかった。労働党の新左翼の一部

は当初D'66への参加を意図していたが、結党に至る議論の中で経済左翼路線をとるか否かで折り合いがつかず、労働党の中での変革を選んだ (van der Land, 2003, p. 23)。D'66、PPR、PvdAの左派統一政党計画の破綻もこの立場の違いからきている。

この違いは社会運動とのつながりの有無とも重なっており、前者は平和運動、環境運動、女性解放運動、途上国との連帯運動といったさまざまな新しい社会運動と連携していた (Kriesi, 1989)。PSPなどの小政党が運動と密接に連携していただけでなく、彼らに対抗する都合上、労働党も運動に対して開放的な対応を取らざるを得なかった。これに対してD'66は運動の内部にシンパシーを持つものはいたものの、密接な連携を図ったわけではなかった。

現代の政党システムを説明する際に、イシューオーナーシップが投票行動の重要な指針となっており、それぞれの政党が得意な政策領域を持っていると指摘した。これに対して、60年代70年代に文化左派の政党間の違いは得意な政策分野以上に政権参加の可能性や社会運動とのつながりにあった。

## ② 文化右派

60年代の文化変容に直面した既成政党、とりわけ常に政権の中心にいたキリスト教3党は対応に迫られた。彼らは文化変容に心から賛同したわけではないものの、近代化に伴う避けられないものと割り切って甘受した (Kennedy, 1995)。道徳の強制は教会からすれば信徒の棄教を招きかねず、党にとってはさらなる得票減となると考えられたためである。例えば、当初厳格に規制されていたポルノについては、1969年ごろに当局は訴追を完全にやめた。また人工妊娠中絶について、1970年代の初めごろには事実上12週以内の中絶について無制限に行われるようになっていた。現状追認の形で合法化されるのは1981年のことである。安楽死についてもその管理は医師に任せ、中央政府からの介入は可能な限り限定していた。

このように立法を通じて認めはしないものの黙認する戦略はさらなる世俗化を招き、50年代にはキリスト教道徳の支配する国であったオランダが、70年代には現在われわれが想起する寛容で進歩的な国になったのである。

もっとも政治エリートたちの黙認は伝統的価値観を持つ支持者にとって許容できるものではなかった。それに呼応してキリスト教諸政党がその道徳的主張を封じるようになると、1970年代に二つの小さな宗派政党を勢いづけることになった。

その一つは改革派政治同盟Gereformeerd Politiek Verbond, GPVである(Klei, 2010)。この政党は1944年に、改革派教会の一つが神学上の解釈の違いから分裂し改革派諸教会(解放派)が成立したことをきっかけとして、その4年後にARPから分立した政党である。GPVは60年代に入って一人から二人当選するようになる。もともとGPVは成立のきっかけからもわかるとおり、神学上の立場を重視しており、黨員になるためには解放派の信仰をもっていなければならなかった。党への参加の目的は政策を実現するというよりもそれ自体が信仰の一部として自己目的になっており、得票を増やすことは深刻な問題ではなかったのである。それでも60年代に当選者が出るようになった背景には、ARPなど既存のキリスト教政党が世俗化し、それに賛同できない熱心な解放派外の信仰者が投票先を探しあぐねてGPVに投票するようになったためである。

GPVの守旧性は国制のありようにある。GPVはオランダをキリスト教的な国家にすべきと一貫して主張した。彼らによれば主権は神にあり、民主主義のイデオロギーに対抗せねばならないのである。国家は人びとの福祉のためだけにあるのではなく、人びとをより高みへ導くためにあるのである。

しかし、社会的な問題については80年代に左派的な態度をとるようになった。安楽死や人工妊娠中絶に反対するといった点では一貫しているものの、環境問題への配慮や同性愛カップルについて「婚姻」とは異なる法的地位の整備に肯定的な態度を示すようになったのである。

もう一つの政党は改革派政治連盟Reformatiepolitieke Federatie, RPFである(van Mulligen, 2010)。既存のキリスト教民主主義政党の一つ、ARPの内部では60年代から世俗化への迎合に不満を持つ勢力が現れていた。中でも重要なのが1966年に結成された全国福音派同盟Nationaal Evangelisch Verbond, NEVである。この勢力はもはやARPではなくGPVに投票すべきであると主張

し、党を作って地方議会選挙で同党と比例名簿を連結することも模索したが、もともとGPVが解放派のみを対象として他宗派の信徒との政治協力に否定的であった上に、解放派が分裂して離反した勢力がNEVに軒を借りる事態に及んで両者の関係は決定的に悪化し、政治協力の道は閉ざされた。

NEVはその後、CHU, KVP内部の世俗化に不満な勢力と協力し、1975年にRPFを設立した。その綱領においては、カルヴァン派神学を一応の基礎に据えるもののその信仰を受け入れない者にも開かれていた。

このような設立の経緯から、当初は世俗化の波に抗し、道徳的倫理的墮落と戦う守旧的な性格を持った政党であった。しかし、80年代にはいるととりわけ若い世代からより積極的な政策を掲げるべきとする主張がなされるようになる。これは80年代を通じて党内対立を惹起した。19世紀以来オランダの宗派政党には政府の役割を限定すべきという考えが共有されており新たな争点を掲げて政府を大きくすることは旧世代には受け入れがたかった。しかし80年代末より若い世代の主張が勝って党の綱領では環境や途上国援助などの争点が強調されるようになっていく。この方針選択は奏功し、90年代前半には各種選挙で議席増に成功するのである。

### 3. 80年代末から90年代の転換とその後

これらの文化変容と反動の政党システムへの反映が再編されるのが、1980年代の後半から90年代にかけてである。その背景は、社会運動の衰退と政党システム分極化の終焉であった。

そしてその結果、政党の政権志向と他党との政策上の差別化戦略が表れてくる。

#### 政党間競争の変質

社会運動は80年代後半に転機を迎える。80年代初頭に平和運動は一時期盛り上がり急激化するが、次第に勢いを失っていった。また、環境運動は集権化と専門化がすすみ、主にCDAによって審議会に取り込まれて環境立法の「共犯」

として牙をぬかれていく (Noort, 1990)。これにともなってそれまで文化左派政党間関係を規定していた政権との距離あるいは運動との距離はもはや意味を持ち得なくなった。政権に参加することはすべての党にとって重要な目標となり、さらにいかにして相互の差別化を図るかが課題となったのである。

まず労働党は1985年を境に新しい社会運動と距離をとるようになった。1979年に巡航ミサイルを国内に配備せよとNATOが要求したのに対して平和運動は反対をしていたが、このとき党首であったデン・アイルは配備には反対したものの、運動と新左翼が求めていた教会間平和協議会のスローガン「すべての核兵器をオランダ国土から排除せよ」への支持は見送った (Kriesi, 1989)。党が無批判に平和運動に追従すれば国内外から党の資質を疑われかねないとの判断であった。労働党と運動との亀裂は深まり、80年代の後半には次第に薄れていく (Koopmans & Duyvendak, 1991)。1986年の総選挙の敗北を受けて労働党の分極化戦略をけん引してきたデン・アイルが引退し、のちにオランダ版「第三の道」の立役者となるコックが党首となった。

しかし、労働党は経済左翼・文化左派をパッケージ化した政権政党として支持されていたものの、この間に進んだ政策上の得意分野の創出には失敗していた。コック政権のあと、人気のある政治家を党首にして何度か選挙を持ちこたえるものの、他の左派政党に支持者が流れて急激に得票を落とすことになった。経済左派としての立ち位置も、左翼ポピュリスト政党である社会党 Socialistische Partij, SPの台頭により確実なものではなくなっている。

この時期には新しい社会運動そのものが下火になったことにより、彼らと密接な協力関係にあった小さな左派政党は80年代を通じて得票も党員数も減少していった。これらの政党同士も長らく政策や選挙で協力していたが、支持の落ち込みに直面して対応策を考えざるをえなくなった。こうしてPSPとRRPに共産党 Communistische Partij van Nederland, CPNおよび小規模な福音派政党を加えて1990年に設立されたのがグリーンレフト, Groen Links, GL<sup>10)</sup>である。グ

---

10) 結党当初の名称はGroen Linksであったが、1992年にスペースがなくなりGroenLinksとなった。

リーネフトは経済左派としての立場を堅持しつつもこの頃にはもはや時代遅れとなっていたマルクスレーニン主義（CPN）や自主管理（RRP）の主張を抑制し、環境を旗印に再編を果たしたのである（Voerman, 2010a）。

もっとも現在に至るまでGLは政権入りを果たしていない。オランダの政党システムにおいては、イデオロギーの左と右それぞれで有権者をとりあう状況になっている。有権者全体では右派のほうが多く、GLが得票を拡大してもそれは左派全体の得票のかさ上げにはならない。特に経済的にかなり左に位置するGLは右派政党から連立の対象としては優先順位が低く、連立交渉はしても実際に与党になるのはむつかしいのである。

D'66は文化左派の中でも独特の地位を保っていた。デン・アイル政権の崩壊後、左派協力をやめて労働党から距離をとった。当初は行政改革のみを掲げ、それが実現すれば解党する方針であったがそれを転換し、環境や女性問題といったより広い領域に手を広げた。1977年選挙の際の「分別のある選択肢Het redelijk altanatief」というスローガンはそれを端的に示している。経済政策では中道やや右寄りの立場をとり、デン・アイルが固執するケインズ主義的な経済政策を批判してマネタリストに接近した。

D'66はこうして、忠実な支持者が多いわけではないものの多くの有権者から投票先の選択肢として考えられる政党になり、また他の政党からも連立与党の候補とみなされるようになった。D'66は得票は必ずしも多くないが、オランダ政界において大きなプレゼンスを持つようになった（van Holsteyn & Irwin, 2021）。政策上の得意分野は政治改革と教育政策にあるが、D'66の強さは左翼から中道右派まで広い範囲で、投票先の候補に数えられているところにあるといえよう。その点で、現在のオランダの政党間競合の中で異色の存在である。

右派の側にも再編が起きた。RPFとGPVは合併して2000年にキリスト教同盟ChristenUnie, CUを結成した。もともと世俗化していった既成キリスト教政党に不満を持つ層の受け皿であったこれらの党は、すでに述べた通り若い世代を中心に環境などより積極的に政策を主張することで支持を伸ばしていたが、それを実現するには党勢の拡大が必要だと考えられた。また、1994年からそれまで一貫して政権の中心にいたキリスト教民主主義政党が野党に転落し、社民



と自民によるいわゆる「紫連合」政権が成立した結果、安楽死など生命倫理上ラディカルな政策が促進されるようになり、それを止める必要があった。このため、CUはより政策志向で政権志向な政党となったのである (Voerman, 2010b)。

その後、第二次バルケネンデ政権では連立に入り、リュテ政権でも少数派の上院を支える一角として政権に近い党となった。

#### 4. 2000年代以降——右翼ポピュリスト政党の参入

以上の通り、オランダでは60年代70年代に伝統的価値観を掲げる政党が既成のキリスト教民主主義政党とは別個に政党システム上に定着した。右翼ポピュリスト政党はこの政党配置の中に参入していくことになる。オランダの右翼ポピュリスト政党の特徴としてライフスタイル、特にジェンダーやセクシュアリティの争点について周辺諸国の同様の政党と比してより進歩的な立場をとっていることが挙げられるが、その一つの理由はオランダ特有の政党システムに求められよう。2000年代以降のオランダの右翼ポピュリスト政党の盛衰と合わせて以下で検討しよう。

現在のオランダにおける右翼ポピュリスト政党の系譜の出発点はピム・フォルタイン党、Lijst Pim Fortuyn, LPFである。LPFはその後にいくつも現れるオランダの右翼ポピュリスト政党の起源ととらえられている。2002年に初めて選挙に参加したこの党は、イスラーム差別的な言説にもかかわらず17パーセントの得票で26議席を獲得し、オランダ全体に衝撃を与えた。

党首であったピム・フォルタインはオランダにおける文化変容を完了したものととらえ、オランダ人は解放された平等な国民であると主張していた。この主張は一方ではジェンダー・セクシュアリティの価値観の変化を肯定的にとらえ、過去に引き戻しはしないという意味をもっている。ダウフェンダックは文化変容によってオランダではこの点を含め国民が同質化し、その中で「オランダ的な」価値観を共有できないひとびとを許容できない層が現れたと分析する。「オランダ的な」価値観という発想は多文化主義の対極にあるもので、文化変



容はオランダ社会に多文化主義というよりも同質化をもたらしたといえるだろう。フォルタインはそのような同質性に郷愁を感じる層に支持を得たのである (Duyvendak, 2011)。フォルタインは他方ですでに解放は完了しているとみなしており、彼の言説はオランダ社会になお残る差別を覆い隠そうとするものでもある (Oudenampsen, 2021)。

文化変容の受容は彼の主要な論点であった反イスラームの言説にも表れている。彼がイスラームを攻撃する際に参照したのは、2001年にカ rilル・エル＝ムムニというモロッコのイマームが全国放送のテレビで同性愛は危険で感染性のある病気であると主張した事件であった。この発言は大きな反響を呼び起こし、オランダにおいてイスラームは伝統主義的でオランダの寛容の文化になじまないという単純化された構図が喧伝された。自身も同性愛者であることを公言していたフォルタインは、「女性とゲイの解放をまた一からやり直すのはご免である」と主張した (Mepschen et al., 2010)。

このようにフォルタインは反イスラームとオランダの近代性を対置し、差別や人種主義とは異なる方法で反イスラーム・反移民の言説をフレーミングしたのである (水島2019[2012])。この視座は今に至るまでオランダの右翼ポピュリスト政党を規定している。

フォルタインの言説が差別を見えなくする意味もあったことからわかる通り、オランダの右翼ポピュリストがジェンダーやセクシュアリティの問題を解決するために正面から取り組んでいるととらえるべきではない。オランダ社会が解放されたものであると解釈することは、裏を返せばこれ以上解放の必要がないことになるからである。LPFにおいては公約の中に女性の労働参加といった旧来のジェンダー問題に関する記述がみえるものの、PVVではもっぱら反イスラームを主張するための材料に使われている (De Lange & Mügge, 2015)。むしろ、ジェンダーに関しては平等化の促進について消極的であるといえる (Verloo, 2018)。

ジェンダーやセクシュアリティが必ずしも重視する争点でないならば、選挙で勝てればむしろこれに積極的に反対する立場をとる可能性もあろう。しかし、彼らにとってこの立場は得票上のメリットはない。現在のオランダでジェン

ダーやセクシュアリティに関して伝統的な価値観を持つ人はほとんどいないためである。例えば (Gerhards, 2010) によれば「同性婚はヨーロッパ全体で認められるべきである」と答えた人は80パーセントを超えており、EUの中でも突出して高い数字を出している。

もっとも、政党は必ずしも支持者と近い政策位置をとるとは限らない。PVVの政策位置と支持者の政策位置とを比べてみると、同性愛者の権利についてはほぼ一致しているが、これは他のヨーロッパ諸国の右翼ポピュリスト政党については支持者の方がリベラルな立場をとり、党の側がより伝統主義的な立場をとっているケースが散見される (Backlund & Jungar, 2019)。フェモナシヨナリスト、ホモナシヨナリストとよばれる、女性や性的マイノリティの権利を擁護する立場をとりつつ、反移民である人々がかなりの程度いるのである (Spierings & Glas, 2021)。

これはキリスト教信仰の篤い層の票を獲得しようとしているかの違いにある可能性がある。ベルギー、スイス、ノルウェーにおいては熱心なキリスト者は普通の信徒に比べて強い反移民感情を持つ傾向にあり、右翼ポピュリスト政党はジェンダー・セクシュアリティの争点で伝統主義的な立場をとることによって彼らの票を得ることが見込める (Spierings et al., 2017)。しかし、オランダでは反移民感情について信仰の篤さでは違いがない (Immerzeel et al., 2013)。それでも宗教政党がなければそれでもキリスト教徒の票を取りに行く戦略はありえようが、信仰を正面から打ち出す政党がすでにある状況で、あえて伝統主義的な立場をとっても得票上のメリットは見込めないといえよう。

## おわりに

オランダの参入障壁の低い選挙制度は、60年代70年代の文化変容の時期に多くの新政党の登場・隆盛をもたらした。これらの政党が80年代末から90年代の再編をへて、現在GAL-TAN軸と呼ばれる対立軸の中核的な政党となっている。そのため、現在の政党システムは60年代70年代の政党形成時の特徴が部分的に反映されている。

第一に文化変容への反動として現在しばしば想定されている右翼ポピュリスト政党ではなく伝統的なキリスト教政党が形成され、定着している。この政党は生命倫理などの争点では伝統的な立場を崩さないものの、環境や多文化主義といった争点では中道左派の立場をとっている。

第二に伝統的なキリスト教政党の存在がオランダの右翼ポピュリスト政党はライフスタイルにおいて伝統主義に振り切れた立場をとりにくくしている。これらの政党は文化変容によるオランダ社会の解放を強調しており、ジェンダーやセクシュアリティの観点で「バックラッシュ」とまではいいきれないであろう。

第三に文化左派を代表するD66とGLとで経済争点での立場が異なることである。文化変容を反映した諸政党同士の違いの一つは経済政策上の位置にあった。経済的に中道のD66と明確に左派のGLの違いは60年代以来のものである。この違いはD66が連立与党の常連で、GLが政権に食い込めないという差にもつながっている。

以上の通り、文化変容とその反動を一つの波ととらえるよりも、60年代70年代の波はさまざまな形で現れ、その反動も複数波にわたるが、オランダでは完全比例代表制という選挙制度によって政党システムという形でその痕跡が現在まで残っているのである。

#### 文献一覧

- Backlund, A., & Jungar, A. C. (2019). Populist Radical Right Party-Voter Policy Representation in Western Europe. *Representation*, 55 (4), 393-413. <https://doi.org/10.1080/00344893.2019.1674911>
- Coenders, M., Lubbers, M., Scheepers, P., & Verkuyten, M. (2008). More than Two Decades of Changing Ethnic Attitudes in the Netherlands. *Journal of Social Issues*, 64 (2), 269-285. <https://doi.org/10.1111/j.1540-4560.2008.00561.x>
- Coenders, M., Lubbers, M., te Grotenhuis, M., Thijs, P., & Scheepers, P. (2015). Trends in ethnocentric reactions under the Dutch population, 1979-2012. *Mens En Maatschappij*, 90 (4), 405-433.

- De Lange, S. L., & Mügge, L. M. (2015). Gender and right-wing populism in the Low Countries: Ideological variations across parties and time. *Patterns of Prejudice*, 49 (1-2), 61-80. <https://doi.org/10.1080/0031322X.2015.1014199>
- Duyvendak, J. W. (2011). *The Politics of Home. belonging and Nostalgia in Western Europe en the United States*. Palgrave Macmillan.
- Hooghe, L., Marks, G., & Wilson, C. J. (2002). Does Left/Right Structure Party Positions on European Integration? *Comparative Political Studies*, 35 (8), 965-989. <https://doi.org/10.1177/001041402236310>
- Immerzeel, T., Jaspers, E., & Lubbers, M. (2013). Religion as Catalyst or Restraint of Radical Right Voting? *West European Politics*, 36 (5), 946-968. <https://doi.org/10.1080/01402382.2013.797235>
- Jolly, S., Bakker, R., Hooghe, L., Marks, G., Polk, J., Rovny, J., Steenbergen, M., & Vachudova, M. A. (2022). Chapel Hill Expert Survey trend file, 1999-2019. *Electoral Studies*, 75, 102420. <https://doi.org/10.1016/J.ELECTSTUD.2021.102420>
- Kennedy, J. (1995). *Nieuw Babylon in aanbouw Nederland in de jaren zestig*. Boom.
- Klei, E. (2010). "Een toevlucht voor de Zijnen" Het Gereformeerde Politiek Verbond (1948-2003). In J. Hippe & G. Voerman (Eds.), *Van de marge naar de macht. De ChristenUnie 2000-2010* (pp. 11-30). Boom.
- Koopmans, R., & Duyvendak, J. W. (1991). Protest in een pacificatie-democratie. De Nederlandse nieuwe sociale bewegingen in internationaal vergelijkend perspectief. *Mens En Maatschappij*, 66 (3), 233-256.
- Kriesi, H. (1989). The political opportunity structure of the Dutch peace movement. *West European Politics*, 12(3), 295-312. <https://doi.org/10.1080/01402388908424754>
- Noort, W. J. van. (1990). De fluctuerende milieupolitiek. *Beleid En Maatschappij*, 17 (3), 132-156. <https://ugp.rug.nl/beleidmaatschappij/article/view/26637>
- Oudenampsen, M. (2021). *The Rise of the Dutch New Right. An Intellectual History of the Rightward Shift in Dutch Politics*. Routledge.
- Pellikaan, H., De Lange, S. L., & Van Der Meer, T. W. G. (2018). The Centre Does Not Hold: Coalition Politics and Party System Change in the Netherlands, 2002-12.

- Government and Opposition*, 53 (2), 231–255. <https://doi.org/10.1017/gov.2016.20>
- Spierings, N., & Glas, S. (2021). Green or Gender-Modern Nativists: Do They Exist and Do They Vote for Right-Wing Populist Parties? *Australian Feminist Studies*, 36 (110), 448–468. [https://doi.org/10.1080/08164649.2022.2051166/SUPPL\\_FILE/CAFS\\_A\\_2051166\\_SM9378.DOCX](https://doi.org/10.1080/08164649.2022.2051166/SUPPL_FILE/CAFS_A_2051166_SM9378.DOCX)
- Spierings, N., Lubbers, M., & Zaslove, A. (2017). “Sexually modern nativist voters”: do they exist and do they vote for the populist radical right? *Gender and Education*, 29 (2), 216–237. <https://doi.org/10.1080/09540253.2016.1274383>
- van der Land, M. (2003). *Tussen ideaal en illusie. De geschiedenis van D66, 1966–2003*. SDU.
- van Holsteyn, J. J. M., & Irwin, G. A. (2021). “Wie zijn die mensen?” over de kiezersaangang van D66, 1967–2021. In *Tussen bestormen en besturen. 55 jaar D66 in de Nederlandse politiek (1966–2021)* (pp. 161–180). Boom.
- van Mulligen, R. (2010). Tussen evangelisch en reformatorisch. Het politiek getuigenis van de Reformatorische Politieke federatie (1975–2003). In J. Hippe & G. Voerman (Eds.), *Van de marge naar de macht. De ChristenUnie 2000–2010* (pp. 31–50). Boom.
- Verloo, M. (2018). Gender Knowledge, and Opposition to the Feminist Project: Extreme-Right Populist Parties in the Netherlands. *Politics and Governance*, 6 (3), 20–30. <https://doi.org/10.17645/pag.v6i3.1456>
- Voerman, G. (2010a). Een fusie in drie bedrijven. De moeizame totstandkoming van GroenLinks. In *Van de straat naar de staat? GroenLinks 1990–2010* (pp. 229–332). Boom.
- Voerman, G. (2010b). Van de marge naar de macht. De ChristenUnie (2000–2010). In G. Voerman & J. Hippe (Eds.), *Van de marge naar de macht. De ChristenUnie 2000–2010* (pp. 91–131). Boom.
- 田口晃 (1989) 「文化変容と政治変動——1970年前後のオランダ」 犬童他編『戦後デモクラシーの安定』岩波書店

- 水島治郎(2001a)『戦後オランダの政治構造——ネオ・コーポラティズムと所得政策』  
東京大学出版会
- 水島治郎(2001b)「[分極化戦略]と[行動政党]——オランダ労働党における政権戦略と組織原理の転換」『甲南法学』41巻3・4号、pp. 289-342
- 水島治郎(2019[2012])『反転する福祉国家』岩波書店
- 水島治郎(2021)「オランダ:「完全比例代表制」の1世紀」『年報政治学』72巻1号、  
pp. 40-61

### 謝辞

本論文は2022年度日本政治学会大会企画委員会企画「現代欧州における価値対立と政治」のペーパーを修正したものである。討論者の中井遼先生、古賀光生先生、フロアの先生方に御礼申し上げる。

また、学会ペーパーを書くにあたっては、2022年度東京大学大学院法学政治学研究科「ヨーロッパ政治研究の方法と論点」のゼミの皆さんから多くのコメントをいただいた。伊藤武先生とゼミ生の皆さんに御礼申し上げる。

本研究はJSPS科学研究費補助金21H04386および同18H00820の助成をうけたものである。